

Title	ニーバーの「キリスト教現実主義」をめぐって
Author(s)	古屋, 安雄
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.51, 2012.1 : 49-60
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4210
Rights	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

ニーバーの「キリスト教現実主義」をめぐつて

古屋 安雄

キリスト教現実主義との出会い

私がラインホルド・ニーバーに個人的に会ったのは、一九五三年頃で彼が脳梗塞で倒れて休んでいたときであった。当時、私はプリンストンの神学生であったが、ユニオンの神学生であった姉が、ニーバー夫人の手伝い（アルバイト）をしていた。姉に会いに行つた際に、ニーバーと一緒に食事をし、親しく話し合う機会があつたのである。

数年後に、チャールズ・ウィリアム・ケグリとブラドールの編集したニーバー研究論集『ラインホルド・ニーバー』(Charles William Kegley and Robert W. Bretall, eds. *Reinhold Niebuhr: His Religious, Social, and Political Thought*, 1956)に、ニーバー自身が神学者と呼ばれるのは恥ずかしいと書いていたが、当時の彼は政治学、とくに国際政治に没頭していたように見えた。それはたびたび訪れた彼の書齋を見た私の印象でもあつた。書棚にあつた神学書といえばバルトの『教会教義学』一冊だけ、しかも、うすいⅢ／4だけであつた。ニーバーの著作でいえば、前年の一九五二年に出版したばかりの『アメリカ史のアイロニー』が書棚にあつた。

しかし、ニーバーは政治学の研究者ではなく、イエール大学の大学院で神学修士をとった後、牧師として出発したのであった。私が邦訳した『教会と社会の間で——牧会ノート』(新教出版社、一九七一年、*Lessons from the Notebook of a Tamed Cynic*, 1927) は、一九一五年から一九二八年までの一四年間、牧師として新興都市デトロイトで牧会したときの日記である。二五年間の学究生活の後に「牧会の職務と問題に取り組んだときの私の未熟さを後悔することはあるが、牧会に献身した年月を私は後悔していない」(同訳書、二一三頁)と一九五六年の「新版のための序文」に書いたニーバーである。

ところで何故、私が『教会と社会の間で』を邦訳したのかは、国際基督教大学での大学紛争と関係している。当時、新左翼の学生に同情的であった私を、「現実」に引き戻してくれたのは東京神学大学の大木英夫教授であった。本書は私に「キリスト教現実主義」の原点を教えてくれたと思っている。とくに、ニーバーがその「序言と弁明」に書いている言葉に、当時の私は助けられた。

だがこのような巡回「預言者」からどのような圧力が加わっても、牧師は預言者であるとともに政治家(a statesman)でもあらねばならぬという事実を変えることはできない。牧師には原理とともに状況にもかかわらずあらねばならぬ責任がある。特殊な状況にあつてとるべき行動は、絶対的な基準のみならず。牧師が指導している人々の生活の中で可能な手段を考慮して判断さるべきである。(同訳書、八頁)

政治家は、政治的手腕が往々にして機会便乗主義に堕し、その機会便乗主義と不誠実は厳密には区別できないものであるということを知るべきである。しかし預言者は、その高い展望と判断の非妥協性が常にその中に無責任な語調を含んでいることを認識すべきである。(同訳書、九頁)

こう言った後、アッシジのフランチェスコが法王インノケンティウス三世よりも、あるいは預言者であったウイリアム・ロイド・ギャリスン (William Lloyd Garrison, 奴隷廃止運動を展開した人物) が政治家であり、かつ機会便乗主義者であったアブラハム・リンカーンよりも道徳的に優れていたと信ずる理由はない、と言い切っていたのに、開眼された思いであった。と同時に、マックス・ウェーバーの「信条倫理」と「責任倫理」の区別が初めて分かった気がした。それから、私は疑うことなく、新左翼の学生たちの信条主義と抵抗主義と反対主義に対抗して、大学の保持と維持のために励んだのであった。これは、ニーバーの「キリスト教現実主義」に立った行動だと思っている。その意味で、ニーバーから深く学んだことを感謝しているものである。

ついでに言うと、ニーバーの翻訳に際して、分かりやすく翻訳したつもりである。それまで、ニーバーというとギフォード講演の一部(『光の子と闇の子』と『人間の本性と運命』の前半)が出ていたが、難解だと自他共に思い込んでいたからである。ニーバーの思想は、もつと分かりやすいものだということを知らせたいと思ったからである。その意味では、本書は日記でもあり、分かりやすい書物であった。ニーバーの原点が牧会であったことを知らせるよい書物であった。

キリスト教現実主義に対する疑問

ところが、私はニーバーの「キリスト教現実主義」には、深い疑問を抱いていた。いや、近年益々「キリスト教現実主義」に対する疑問は深まっているのである。

私がニーバーのキリスト教現実主義に対する批判を最初に書いたのは、『キリスト教国アメリカ』（新教出版社、一九六七年）のなかの「ベトナム問題——ラインホルド・ニーバーのアイロニー」である。

これは、私が当時アメリカにいて、実感したことでもあるが、何故アメリカ・キリスト教協議会（NCC）を初めてして、アメリカの主流教会は、ベトナム戦争に対して、つまりその軍事介入政策への批判が遅れたのかという問題である。

ニーバーが批判を始めたのはアメリカが北ベトナム爆撃を始めた一九六五年である。一言でいうと、アメリカの教会に道徳主義に対して「キリスト現実主義」の考えが広がったために、現実の政策に対する批判が遅れたのではないか、ということである。キリスト教現実主義を主張したニーバー自身のアイロニーだというのである。

ニーバーはFOR（Fellowship of Reconciliation）という絶対平和主義者の団体の委員長であった。しかし、一九三四年に突如辞任し、「キリスト教現実主義」を主張し始める。

当時、アメリカの教会は、第一次世界大戦後の幻滅から、平和主義一色であった。ニーバー自身がそうであったように、また「クリスチャン・センチュリー」というアメリカ・プロテスタントの主要な教会雑誌の論調もそうであった。

ところが、一九三〇年代に入ってから、つまり日本の軍部の満州政策やドイツでヒットラーのナチスが台頭してからニーバーの態度が変わり始める。日本やドイツの強引なやり方に「道徳的」に反対しても、効き目はない。ナチスの拡大を止めるためには、現実的に軍事力で対抗する以外にはない。

日光の東照宮にある左甚五郎の猿の彫りもののように、悪いことに対して「見ざる、聞かざる、いわざる」では、非現実的な無責任な態度ではなからうか（R. Niebuhr, *Christianity and Power Politics*, 1940）。それこそ現代キリスト教の危機である。

そこで、ニーバーが一九四一年に出版し始めたのが、*Christianity and Crisis* 誌（以下「クライシス」誌とする）であ

る。これは、ユニオン神学校の学長、ヴァン・デューセン、プリンストン神学校の学長、ジョン・マッカイなどの広い支持があった。隔週刊行誌で、二万部ちかく読まれていた。とくにワシントンの上院議員に人気のあった雑誌であった。

なお、当時は現実主義が流行した時代であった。ティリッヒの *glaubige Realismus* (信仰的現実主義、一九三二年の「宗教状況」) やクレマーの *blibische Realismus* (聖書の現実主義、一九三八年の「非キリスト教世界におけるキリスト教使信」) などがあるが、すべてニーバーとバルトに近い立場からの主張である。アメリカでは、ネオ・オーソドクシーと呼ばれた神学的立場であった。弟の H・リチャード・ニーバーは、ティリッヒを訳しながら、*Religious Realism* (宗教的現実主義、in *Religious Realism*, ed. D. C. Macintosh, 1931) の立場をとった。

ところで満州事変をめぐって、ニーバー兄弟が論争したことに対して、弟が平和主義者で、兄がキリスト教現実主義者であるかのように思われているふしがあるが、弟が平和主義者であったことはない。

それゆえに、弟リチャードの弟子で、ジョンソン大統領の支持者であったポール・ラムゼイ (プリンストン大学教授) は、ラインホルド・ニーバーがベトナム戦争に反対署名したときに、「まるでラインホルド・ニーバーがそれまで存在していなかったように」と慨嘆したのであった。

太平洋戦争が始まったのは、日本海軍のパール・ハーバー奇襲攻撃などによってであった。その時、アメリカの教会における平和主義の立場、現実主義の立場のいずれを選ぶべきかという問題は、日本の戦争開始によって解決を見たのであった。つまり、現実主義の路線へと傾いたのである。戦争を欲していたルーズベルト大統領は日本の攻撃によって救われたともいえるのである。

ベトナム戦争をめぐるキリスト教会とニーバーの態度

しかし、「クライシス」誌がベトナム戦争反対の立場表明をすることが遅れたことに代表されるように、アメリカの主流教会、そしてニーバーも明確に反対することが時期的に遅れ、戦争反対が表明されるようになったのは、アメリカの北爆が始まってからである。道徳主義に反対したキリスト教現実主義がアメリカの教会に受容されたからだ、というのが私の意見である。それゆえに、ニーバーのアイロニーといったのである。

同じ現実主義者であった外交評論家のウォルター・リップマンでさえ、一九六四年にベトナム戦争に反対していたが、ニーバーが「クライシス」誌でベトナム戦争に反対したのは、一九六五年の六月になってからであった。「クライシス」誌がベトナム問題を取り上げたのは一九六四年の六月であるが、その頃、ニーバーはいわゆる「ドミノ理論」を信じている。ベトナムが共産化すれば、ラオスやカンボジアも共産化するという理論である。共産主義という悪を防止するためには現実的に戦争もやむをえないという立場である。

道徳的にではなく現実的に「力の政治」も考慮して外交はすべきであるというニーバーの立場を宣伝したのは、アーネスト・リフエヴァー (Ernest W. Lefever) の著書 *Ethics and United States Foreign Policy*, 1957 (『倫理とアメリカ外交政策』) である。この書物の主張することがアメリカの教会にあまりに広がったために、ベトナム戦争批判に遅れをとったのであるまいか。

一九六五年の七月と一二月に、「センチュリー」誌と「クライシス」誌は「外交政策について」という共同声明を出して、NCCの国際問題委員会は何をしているのかと突き上げている。それは教会内でも世界教会協議会(WCC)や

東アジアキリスト教協議会(EACC)などから反対声明がすでに出されているからであった。

とくに、「クライシス」誌に出たインドのジョシユア・ラッセル・チャンドランとスリランカのT・ダニエル・ナイルズのベトナム戦争批判論文である。ことにナイルズの最後の一句「アジア人の生命は安価なのか」(Is human life in Asia cheap?)は、アメリカの教会の人びとに戦争の持つ道德的問題を思い起こさせたようである。

個人的に思い出すのは、ユニオン神学校を辞任していたヴァン・デューセン(Henry P. VanDusen)との議論である。ヴァン・デューセンはベトナム戦争を支持していた。彼はニーバーが、ナチズムとの戦争を支持して発行した「クライシス」誌の発行人になったくらいであるから、そのニーバーがベトナム戦争を批判するのはおかしいというのである。そしてあくまでベトナム戦争に反対の主張をした私に最後に言った言葉を思い出す。「それにしても、私のように大きなアメリカ人が、君のように小さなアジア人をいじめているのはグロテスクな図だ」。

それらに加えて、日本の教会から「ベトナムに平和を求めるキリスト者の緊急会議の活動として大村勇氏を団長とする飯坂良明氏などの超教派による平和使節団が一九六五年の七月に渡米し、アメリカのキリスト協議会と話し合ったこともアメリカの教会に対するモラルプレッシャーになったであろう。ところでその当時日本で、ただ一人ベトナム戦争を支持したのは、大木英夫であった。その理由は、日本のキリスト者がインテリと同じく、みなソ連寄りであったからである。チェコのロマドカが主唱する「キリスト者平和の会」一色だったからである。日本が憲法でいうような健全なる民主主義のためには、あえてそれに異を唱えるためであった。同じことをアメリカから帰国してから感じていた私は、大木の採った立場は理解できたつもりである。

にもかかわらず、大木英夫の師であるラインホルド・ニーバーの「キリスト教現実主義」には疑問を持たされた。第一は、そのベトナム戦争に対する態度である。後には、明確に北爆に反対を表明したが、軍事介入に対する警告にとどまっていたといわざるをえない。第二にニーバーのキリスト教の道德主義を単なる感傷主義と片づけることに疑惑を

感じた。キリスト教信仰は、道徳あるいは倫理と密接な関係にあるものである。

ニーバーの態度がいまいであった背景には、ニーバーが支持する民主党自体が、ベトナム戦争に対して分裂していたということがある。ジョンソンの側近であるD・ラスク、M・バンディー、A・シュレジンジャーなど“best and brightest”が冒した過ちであった。その一人が一九六一―六九年に国防長官であり、「歩くコンピューター」と呼ばれたロバート・S・マクナマラであるが、後でベトナム戦争の過ちを認めている。他方、外交委員会の委員長フルブライトとその委員であるモース上院議員はつとに反対のリーダーであった。

ニーバーのアイロニーを見たのは、六六年二月の「クライシス」誌の二五周年祝賀会であった。委員長のベネットとモーゲンソーが困った顔をしながら、話を聞いていた。なぜならハンフリー副大統領がジョンソン大統領を「ニーバー的な現実主義者」とたたえる話をしたからである。そのことをリチャード・フォックスはニーバーの伝記の中でニーバーにとって“most painful moment”（最も痛ましい瞬間）といっている。またC・C・ブラウンは『ニーバーとその時代』（高橋義文訳）の中で、ベトナム戦争を取り上げたところを、訳者は「東南アジアにおける舵取りを間違えた冒険」と訳しているが、原文は“A Misguided Venture in Southeast Asia”である。誤って導かれたという意味である。

私はニーバーが、はじめからベトナム戦争を憂慮していたことを否定するものではない。ただ彼は一九五〇年以来国務省の顧問であったし、アメリカ教会は、それこそキリスト教現実主義のために「誤って導かれた」のではないかといっているのである。そのためにニーバーはNCCを批判したのであるが、皮肉なことに、それはニーバーの反道徳主義のキリスト教現実主義の影響であるというのが私の見解である。

ニーバー評価のアイロニー

これまで、ニーバーのアイロニーということ、アメリカで指摘したのはW・L・ミラーだけである。ニーバーの肖像がタイム誌の表紙に出た頃である。何故ニーバーはその神学を好むが、その政治を嫌いな保守主義者たち（例えば「タイム」誌と「ライフ」誌の社主であるH・ルイス氏）に誤解され、逆にその政治は好むがその神学が嫌いなリベラルたちに誤解されるのか。ニーバーにとっては、その神学から政治がでてくるのである。ここにミラーはアイロニーを見るのである。

私は、それから十年後のベトナム戦争のときにニーバーにアイロニーを見るのである。

これは、アジア人にしか見えないアイロニーかも知れない。

私がベトナム戦争のみならず、如何なる戦争にも反対するのは、以下の三理由による。つまり、キリスト教現実主義はもはや肯定できない三つの理由である。

(1) 現代戦争は、第二次世界大戦から、ベトナム戦争そしてイラク戦争に至るまで、非道德的である。現代戦争は「総力戦争」であって、戦闘員と非戦闘員の区別がない。婦人や子供を巻き込み、戦争の性格が一変してしまった。それに、わが国の敗戦が示すように、原子爆弾、核兵器を発明してしまった。一瞬にして何万人を殺略してしまう、大量虐殺の時代になった。ベトナム戦争で明らかになったように、ABCという非人間的な兵器を生み出し、より残酷性

を増した。それらは、さらに人体に数世代に及ぶ有害を生み出す。「義戦」(Just War)はコンスタンチヌス体制の遺物である。ニーバーは、まだ冷戦構造にとらわれていたのではなからうか。

宮田光雄によれば、たとえば第一次世界大戦では、約一〇〇〇万の死者のうち、九五%が軍人で、一般市民はわずか五%にすぎなかった。ところが、第二次世界大戦では、この比率はほぼ同じになる。朝鮮戦争ではこれが逆転して、軍人一六%に対して市民がなんと八四%になってしまふ。この傾向は益々進んで、ある推計によれば第三次世界大戦になれば、死者三億人として、軍人二%に対して、一般市民は九八%と見られているのである(宮田光雄『思想史論集』第一巻、二〇〇六)。

ヨーダーが、カール・バルトを晩年、「後キリスト教世界の神学者」(Post-Christendom Theologian)と呼び、「核平和主義者」(nuclear pacifist)あるいはメノナイトと同じく「実際には平和主義者」(practically pacifist)になったという所以である。

(2) 現代戦争は非人間的である。日常生活では人を殺すという異常なことを、戦争では日常なこととして、平然とするようになる。また戦争は、拷問を始めとして、慰安婦など日常では考えられぬことをしでかす。戦争は、人間を狂気にしてしまふ。

日本が憲法第九条で、一切の武力を放棄したのは、幣原喜重郎の天皇制護持がその本来の理由であつたにせよ、一九二八年のハーグにおける不戦条約の精神が生きていたであらう。

小山晃祐がいうように、「異教国日本は、はからずも第九条でイエスに、ほかのどの国より近づいた。キリスト教国、軍国アメリカはどの国よりもこの点でイエスの心から遠い国だろう」。

第九条は、日本人が絶対平和主義者でなければ遵守できない条項である。いや、日本人が良心的兵役拒否者にならな

ければ遵守できない。しかも、日本の敗戦が、長崎の聖地である浦上天主堂の上で炸裂した原爆であることは意味深長である。永井隆がいうように、神に献げられた「燔祭」(Holocaust)であるならば、キリスト者の責任は大きいといわねばならない。日本の敗戦と新しい憲法制定は、神の深い摂理ではなからうか。

(3) さらに、M・L・キングが、イエスの精神をガンディの方法から学んだように、キリスト者は非暴力(non-violence)の公民権運動から、平和主義を実践すべきだからである。この非暴力による抵抗は、抵抗運動として有効であることをインドでもアメリカでも証明したと思う。

もつとも、ニーバーはそう考えない。彼は非暴力運動はより「罪が少ない」とは思うが、その支持者が「誇り」を持つなら「もつと罪深い」と考える。

しかし、私はそう考えない。ニーバーのキリスト教現実主義に対するJ・H・ヨーダーの平和主義(Pacifism)のほ
うが、つまり今日の聖書の現実主義(Biblical Realism)の立場のほうが、より現実的だと思う。藤原淳賀が「ジョン・ハワード・ヨーダーの神学——その重要性和課題」(『ジョン・ヨーダーの神学』新教出版社)で紹介しているが、スタッセンらが主張している「神の国倫理」の立場である。つまり、非暴力運動に基づいた絶対平和主義である。

一九六五年の九月にそれまで公民権運動に没頭していたキングが、ベトナム戦争に反対した。良心的兵役拒否者をクエイカーやメノナイトのような宗教的良心に限らない「良心」に拡大した運動である。この運動は戦争反対運動としても有効であることを示したものである。さしものベトナム戦争も学生たちの非暴力運動によって、収束したのであった。

これまで、非現実的と思われていた、クエイカーやメノナイトらの平和主義のほうが、より「現実的」であることを示しているのではなからうか。

ヨーダーが急逝した後に、スタッセンらが編集した『子羊の戦争』(*The War of the Lamb*, 2009)はその副題が示すように「非暴力と平和造りの倫理」(*The Ethics of Nonviolence and Peacemaking*)である。トルストイ、ガンジー、キングらの非暴力と平和主義に立った聖書の現実主義である。

それゆえに、とくに私たち日本のキリスト者は、ニーバーの言うキリスト教現実主義ではなく、聖書の現実主義に立って、憲法の第九条を守るべきではなからうか、というのが今日のニーバー研究における私の結論である。

参考文献

- William L. Miller, "The Irony of Reinhold Niebuhr" in *Reporter*, January 13, 1955.
古屋安雄『キリスト教国アメリカ』(一九六七)。
R. Fox, *Reinhold Niebuhr* (1985).
C. Brown, *Niebuhr and His Age* (1992).
G. Stassen & D. Gushee, *Kingdom Ethics* (2003).
J. H. Yoder & M. T. Nāton, *Karl Barth and the Problem of War, and Other Essays on Barth* (2003).
宮田光雄『宮田光雄思想論集』第一巻(二〇〇六)。
J. H. Yoder, *Christian Attitudes to War, Peace, and Revolution* (2009).
J. H. Yoder, *The War of the Lamb: The Ethics of Nonviolence and Peacemaking*, ed. by Glen Stassen, Mark Thiessen Naton and Mart Hamsner, 2009.
東京ミッション研究所ヨーダー研究会編『ジョン・H・ヨーダーの神学——平和をつくり出す子羊の戦い』(二〇一〇)。